

ストラスブールで学んだ・獲得した3つのこと

文学部2年 山中菜摘

私は、2週間のストラスブール大学短期フランス語研修プログラムに参加し、今までに触れたことがない新たな経験をすることで、非常に多くのことを学び、獲得することができた。ストラスブールの地では、さまざまな場面において、日本では経験できないことを、自らの体で感じることはできたが、獲得したそれらはすべて共通して「人とのコミュニケーション」が重要であるということだ。今回は、その「人とのコミュニケーション」に視点を置き、「異なる言語間のコミュニケーション」と「異なる文化間でのコミュニケーション」、「共同生活における人間関係の中のコミュニケーション」の3つの観点に分類し、順に述べていきたい。

（1）異なる言語間でのコミュニケーション

海外での生活における大きな壁の1つに「言語の違い」を挙げることができるだろう。今回のプログラムは語学研修であるため、フランス語を学び、語学力を上達させることが大きな目的である。もちろん行く前よりも、フランス語のリスニング力・スピーキング力は多かれ少なかれ上達したように思う。しかし、自らの能力を上げたり、知識を広げたりすることよりも、私にとっては、異なる言語間におけるコミュニケーションの中で「伝えること・理解すること」の難しさ・おもしろさを学べたことの方が重要な経験であった。実際に、外国語で外国語を学ぶことは、集中力や体力が必要な難しいことであり、先生が言っている事を理解できないことも多かった。そして、聞きたいのにそれがわからないことや、自分の思っていることを伝えられないことは、こんなにも困惑してしまったり、もどかしい気持ちになるのだということは、今回のような研修でなければ感じることはなかっただろう。しかし、それと同じぐらいに、言語で説明ができなくても、人間は人に伝える方法・能力をたくさん兼ね備えているのだということも、授業を通し、身をもって感じることはできた。今回私たちの授業を担当してくださった **Zuzanna** 先生は、私たちがわからない言葉などを辞書で調べるように指示するのではなく、自らの表情やボディランゲージを豊かに用いることによって、その意味を示してくださった。また、インターネットで画像を検索したり、リズムや音楽を用いて、視覚的・聴覚的にも表現してくださった。そうすれば、言語がわからなくても理解し、授業に集中できることが多かった。人間には、万国共通の表情やボディランゲージが存在する。そして人間の五感には、人とのコミュニケーションを助ける大きな力がある。それらを教えてくれた **Zuzanna** 先生に心から感謝したい。

（2）異なる文化間でのコミュニケーション

日本とストラスブールの間には、異なる文化がたくさん存在した。その中でも、フランス人と関わる中で、人とのコミュニケーションにも文化差があるということが今回わかった。

私は、2週間のフランスでの滞在期間中、日本にいるよりも、知らない人とたくさん「挨拶」を交わし、会話をしたという印象が残っている。日本では、知らない人には、言葉をあまり発さずに会釈や笑顔だけでその場を済ますことも多い。また、知らない人には、自分がその人に要求があったとしても、察してもらうのを待っていたり、空気で伝えようとする文化がある。一方のフランスでは、たまたま居合わせた同じ宿舎の滞在者や、お店の店員の方とも、顔を合わせ、挨拶をすることが多かった。そして、伝えたいことは、知らない人でもわざわざ話しかけてははっきりと伝えている姿には感心した。このような人との関わりの差を見て、日本人は、自分の存在を空気で表し、フランス人は、自分の存在を言葉で表しているという印象を感じた。

また、先ほどの言語の話と重なる部分もあるが、フランス人との会話の中では、言語におけるコミュニケーションは取りづらいこともあったが、「伝えようとする心」と「理解しようとする心」や、「受け入れる心」と「受け止めてくれる心」がお互いに存在したのであれば、心を通わせることができるのだと学んだ。そして、互いに意思疎通を図ることができたときの喜びは非常に大きなものであった。

（3）共同生活における人間関係の中のコミュニケーション

今回の研修に参加した20人の研修生とは、2週間毎日顔を合わせ、共に授業を乗り越え、共にたくさんの興味深い体験をした。私にとって、全てフランス語での授業は容易なものではなく、プレゼン形式の発表など得意分野でないことも多かった。しかし、私と同じように、授業に難しさを感じながらも、必死に理解しようと励んでいるまわりの研修生の姿は、大きな刺激となり、自分も頑張ろうという気持ちになることができた。また、グループワークなどで、複数人で1つのものを作り上げることも多く、個々の責任感や協力がなければやり遂げることができなかつた。それらを共に終えた後は、グループの人たちはもちろん、理解しようとして聞いている人たちにも特別な信頼感が生まれた。

また、宿舎における同室での共同生活も、自分にとっては大きな経験であった。2週間という長期間、他人と生活を共にしたことがなかつたため、不安もあったが、食事や洗濯など、家事を共にして、貴重な同じ時間や空間を過ごしているうちに、互いに素を見せ合い、打ち解け合うことができたと思う。共同生活は、相手に少し気を使いつつも、慣れない海外生活において、もしひとりで暮らしていれば、もっと寂しく不安であったようにも思う。

この2週間のフランス語研修において、私が毎日を安心して過ごし、最後まで乗り切ることができた一番の理由は、まわりの研修生たちの存在があったからだ。研修全体を通して、改めてさまざまな場面でたくさん支えてもらっていたのだと感じている。

この2週間を振り返ってみると、本当に「人に恵まれた環境」で生活をさせてもらっていたと思う。私たちにあらゆる手段を使ってフランス語を教えてください、私たちの言いたいことをなんとかして理解しようとしてくださった担当の先生や、困ったときは助けて

くれたり、優しく声をかけてくれたストラスブールの街の人たちや、共に研修を乗り越え、共に多くの楽しい思い出をつくれた研修生の人たちを含め、出会ったすべての人たちに感謝をしたい。何をするにしても、まわりの人たちの存在が自分の経験を作ってくれている。「人とのコミュニケーション」は非常に重要なことであると改めて学んだストラスブールでの2週間であった。